

# 生活困窮者に最も必要なのは、孤立しない環境

仲間、居場所、社会的役割をつくる



特定非営利活動法人  
自立支援センターふるさと会の常務理事、  
精神保健福祉士

滝脇 憲さん

聞き手 編集部

バブル経済の崩壊とともに高齢者ホームレスの問題が深刻化した東京の山谷地域で、生活困窮者の自立支援を行う\*1「ふるさと会」。その中心メンバーとして事業を行う滝脇憲さんは、274人の職員とともに、生活困窮者の悲哀や孤独と向き合いながら居住支援や就労支援に奔走している。滝脇さんのこれまでの取り組みや今後の目標、事業への思いなどについて伺った。

## ホームレス支援には 精神保健の視点が大切

— 学生時代から、生活困窮者の自立支援をしたいと考えていたのですか？

**滝脇** 大学入学時までは全く考えていませんでしたが、先輩に誘われて始めた精神科病院での看護助手のアルバイトがきっかけで、今日に至っています。

その病院には週1、2回、当直の間帯に行っていて、患者さんが暴れたときなどに医師の指示に従って対応するのが仕事でした。何も起こらなけれ

ば、喫煙所で患者さんとずっと雑談していましたけど（笑）。そのとき、皆さんがいろんな悲哀を抱えていることを知りました。口を揃えて話すのは「家に帰りたい」ということです。僕はアルバイトが終わったら鉄格子の扉を開けて帰るわけですが、皆さんに「また来週、さようなら」と言うときの、後味の悪さみたいなものをずっと感じていました。

大学では哲学を専攻していました。が、精神や身体に障害を持つ人に関わるアルバイトばかりしているうちに、精神保健に関心を持ち、精神障害者の

## PROFILE

●たきわき・けん●

1972年生まれ。2002年特定非営利活動法人自立支援センターふるさと会に入職。2003年精神保健福祉士資格登録。現在、同法人の常務理事、都市型軽費老人ホームルミエールふるさと施設長を務める。東京外国語大学外国語学部非常勤講師（社会学）、一般財団法人高齢者住宅財団「低所得の高齢者等への住まい・生活支援を行う事業の全国展開に関する調査研究事業」委員、厚生労働省「生活保護受給者の健康管理の在り方に関する研究会」委員。

\*1 ホームレスを支援するボランティアサークルとして1990（平成2）年に発足し、1999（平成11）年に法人格を取得。生活困窮者が地域の中で住居を持ち安定した生活を送り、社会の中での役割や人としての尊厳、居場所を回復するための支援を事業として展開。台東区、山谷地域から始まった支援活動は、現在では墨田区、新宿区、荒川区、豊島区、世田谷区に広まっている。さまざまな事情でふるさとに帰れない日雇い労働者たちが、仲間とともに故郷の鍋を囲みだんらんすることで元気をだすという思いをもち、発足当初の活動内容が名称の由来。

サポートをしたいと思うようになっていきました。そして、都市の貧困問題と精神障害との関わりに興味を持つようになりまし。

—それで精神保健福祉士の資格をお持ちなのですね。



共同リビングのある地域生活支援センターは、この「いろは会商店街」の中にある

**滝脇** そうです。大学院修了後、通信教育で精神保健福祉士の受験準備をしながら就職先を探していたとき、ハローワークでふるさとの会の求人に出合いました。そこにある住所から、拠点が山谷であることはすぐに分かりました。山谷は日本の中でもホームレスなどの生活困窮者が多く集まっている地域です。生活困窮者は精神的な問題を抱えていることが少なくありません。だから山谷ならば、生活困窮者の自立支援の仕事を通して精神障害の問題にも関わるができると思い、門をたたいたわけでした。

—その、精神的な問題の根底には何があるとお考えですか？

**滝脇** 孤独感だと思います。山谷のホームレスが日雇い労働者向けの簡易宿泊所（以下、簡宿）で保護され、住まいと生活費が保障されても、生きて

いけるとは限らないのです。アルコール依存症の人や、お金をもらってもギャンブルなどにすぐ使ってしまう人もいますから。そうした人たちが抱える問題の根っこには、孤独感があるように思います。

でも、生活環境の中でさまざまな人と関わって「互助」の関係を築ければ、人の役に立ちたいと思えるようになり、それが結果的に、自分自身の健康管理やメンタルヘルスにつながっていくことが分かってきました。こうして、生活の豊かさがつくられていくのだと思います。

ふるさとの会で運営している施設の職員の中には元ホームレスもいますが、彼らと研修会を行った後に飲み会をすると、お酒が好きなのに「明日、早番だから」と控える人がいます。自分の役割を自覚していれば、このように歯止めを掛けることができるのだと思います。

—では、どのように「互助」の関係を築いているのでしょうか。

**滝脇** これは、ふるさとの会を立ち上げたときの代表理事が始めた活動ですが、まちの中に「共同リビング」という場所をつくり、ふるさとの会のサービス利用者に通ってもらいます。簡宿は寝泊りするだけの場所で居住者が集まれるスペースはありませんし、そもそも簡宿に住む人たちは人間関係を築くのが苦手で孤立しやすいので、こうした場所が必要です。ここでは、その日にすることをみんなで話し合っ決めて、それぞれ役割を持って行動してもらいます。

## 家族が担っていた役割を他人が担う時代に

—居住支援もされていますが、どのような形で行っているのでしょうか。

**滝脇** 1つは簡宿で生活保護を受けながら生活してもらう形態です。簡宿で孤立しないように共同リビングに通ってもらったり、職員が訪問したりします。簡宿という居住資源がこれだけあるというのは、地域的なアドバンテージです。

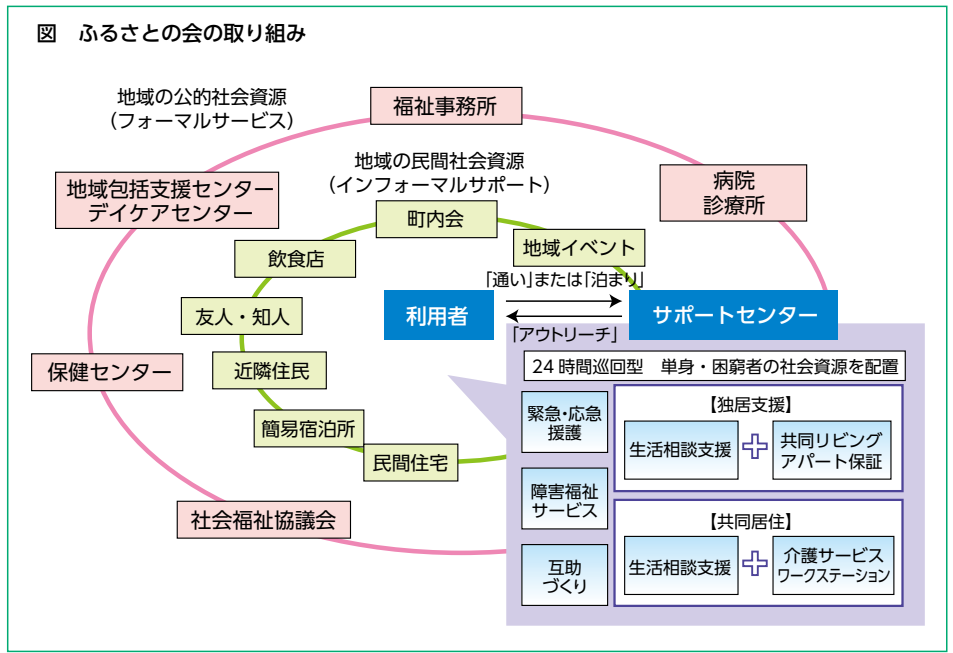
ただ、ADLが低下してつえ歩行や車いす生活になると、当然、簡宿では暮らせません。ではどうするかというと、アパートでの生活が考えられます。

病院や施設に入ることもできますが、多くの人はそれを望まないのです。

以前、山谷から遠く離れた病院に入院していた人が脱走して、朝、共同リビングの前で倒れていたことがありました。よつぼど退院しなかったのだと思います。そのとき、簡宿で暮らせなくなった人の問題に直面しました。それで一番いいのは、やつぱり、アパートで自分の生活を築きながら暮らせることだと思いました。







—それを実現させるためには、多くの課題があったのではないのでしょうか。

**滝脇** 住所不定の人をアパートに保護するという発想は、1990年代にはあまり認められませんでした。アパートで暮らしたことがない人も多いわけですから、光熱費を支払うとかゴミの種類によって収集日が違うとか、そういった生活上の決まりごとを知らない人が多いのです。だから、ゴミの捨て方が分からなくてゴミ屋敷になったり、ライフラインが止められたりする

るくらいなら、簡宿か病院で生活していた方がいいでしょ、というのが常識でした。

ですが、ふるさとの会がアパートの保証人になることや、アフターケアをきちんとする旨を関係者に説明して回することで、少しずつアパートで暮らすことが認められるようになっていきました。

—病状によっては、アパートで暮らすのが困難な人もいるのではないのでしょうか。

**滝脇** そういった人を受け入れるために、ふるさとの会では、24時間職員がいる無料低額宿泊所をつくりました。具合が悪い人や退院してきたばかりの人がいきなりアパート暮らしをするのは大変なので、一時的にここに住んでもらい、職員と一緒に病院に行ったり、日常生活のサポートをしたりしています。

す。

こうして、孤立しないための居場所（共同リビング）、自分の暮らしを築ける住まい（アパート）、手厚い支援を受けられる住まい（無料低額宿泊所）という、基本的な枠組みができていきました。

—ふるさとの会の事業が、国やマスコミからますます注目されてきていますね。

**滝脇** それは、日本全体が山谷の課題との共通項をたくさん持ち始めたからだと思います。

介護保険制度は家族介護を社会化するというところで成り立ちましたが、家族が日常生活の面倒をみているということが前提になっています。家があつて当たり前、家族がいて当たり前、そこに定期的にヘルパーが来ますよ。でも単身化が進んで、家を持っている人

ばかりではなく、経済的な問題を抱えた高齢者が多いということが認識されるようになってきました。介護保険制度も曲がり角を迎え、これまで家族が担っていた役割を、僕らのような他人が担う必要が出てきたのです。

**最期まで仲間と過ごしてほしい**

—ふるさとの会のサービス利用者の「在宅看取り」も行っているとのことですが。

**滝脇** 僕らが看取りを考えるようになったのはここ5年ぐらいのことで、それまでは、「僕は医療職ではないから、最期は病院で」という固定観念を持っていました。でも、多くの職員から、「病院に見舞いに行つて、管でつながれている人たちの中にぽつんと置かれている姿を見ると暗い気持ちになつてしまう」「まるで病院の中で孤



地域生活支援センターで、休憩中の職員たちと

悲しみを緩和していくことを考えていくチームです。ふるさとの会には保健師が1人所属しているので、その保健師がチームリーダーになっています。これまでに、本人に同意を得て在宅で看取った人が5人います。認知症で同意が成立しなかった人なども合わせる、もともと多くの人を看取ってきました。

—実際に看取りを行ってみて、どう



いった変化がありましたか？

**滝脇** 食事もできないうらい弱ってしまった人が「最期に1杯、うまいコーヒーが飲みたい」と言ったら、共同リビングの仲間で喫茶店を経営していたことがある人が、サイフォンでコーヒーを入れてくれました。そうかと思ったら、今度は「冷やし中華が食べたい」と（笑）。そしたら、かつてそば屋を営んでいた冷やし中華も出していたという人が現れ、冷やし中華を作るためにお金をどうやって集めるとか、みんなで知恵を出し合って考えました。こうして、その人を見送る準備をしていくのです。

旅立つ本人はとても心細いはずですが、

さつき話した人は、完全に昼夜が逆転していました。夜中は生と死の境目が見えなくなってくるような時間帯で、怖くて眠れないのだと思います。そういうときに、こうした仲間との関係が本人の不安を和らげるのだと思います。

### 山谷の人が山谷の人を支援することができる

—就労支援もされていますが、どういった流れで体制ができていったのでしょうか。

**滝脇** いろんな人を受け入れているうちに、車いす利用者にも対応できるバリアフリーに近い環境の宿泊所を運営するようになり、それに伴いヘルパーが必要になってきました。でも当時、協力してくれる介護事業者がすぐには見つからなかったため、自前で介護事業所をつくるしかないということにな

り、山谷のおじさんたちに、「ヘルパーをやりませんか」と声を掛けていきました。そうしたら結構、やりたいという人が現れました。

また、障害者や高齢者が地域の中で暮らし続けるためには、介護はもちろん食事や掃除など、いろんなコミュニティサービスが必要になってきますが、失業者をそこに吸収すれば、自立支援もできるということに気がきました。こうして、「山谷の人が山谷の人を支援する」という流れができていきました。現在、アパートや自立支援住宅で暮らすふるさとの会のサービス利用者は1000人以上いるので、それだけの労働市場があります。

—山谷地域で生活困窮者を支えるネットワークづくりも行っていますね。

**滝脇** 重度の障害者を多く受け入れるようになると、一人一人病院に連れて



行くわけにもいかなくなるので、こつちに来てくれる医師やヘルパーを探したり、地域に存在しているサービスを探して利用したりするようになりました。そういうことを必死にやっているうちに、多くの事業者とお付き合いするようになっていきました。

2005（平成17）年、80人規模の簡易宿泊所を借り上げたこともあり、いろんな事業者に協力を得なくてはならなくなったので、利用者ごとに関わっていた医師や介護事業者、薬局の

### 地域の人の協力があってこの仕事は成り立つ

—ふるさとの会のサービス利用者と地域の人たちが交流できる場もつくっていますね。



**滝脇** 僕らが目指しているのは、支援を必要としている人と地域住民とが協力し合う関係を築くことです。そのきっかけとして、ガレッジセールやお祭りなど、誰でも参加できるイベントを開催しています。

それと昨年、管理を依頼されたアパートで行っているサロンの運営のお手伝いを始めました。最近では、生活保護のケースワーカーから、自分が担

当している人もそのアパートに入居させてもらえないかという相談を受けています。そうなれば、支援を必要としている人がサロンを通して地域に溶け込んでいけますよね。僕らだけでは、地域の中にこうした関係性をつくっていくことはできません。僕らの仕事は、活動を理解してくれて、応援してくれる地域の人がいって成り立つのだと実感しています。



どういったきっかけでもよくて、大事なものは、混ざり合ってコミュニティになることです。雑多であることが、コミュニティの一番大切な要素です。バリバリ働ける人だけでコミュニティができるのではなく、「知的障害を抱えている人が認知症の人にそつと寄り添う」といったような、障害を抱えた人同士でなければ感じ取れないこともあります。もちろん、障害者と健常者には課せる作業量の差はあり、それぞれの役割に質的な違いもありますが、それは優劣ではないと思います。

### ビジネスモデルをつくり「支援付き住宅」を増やす

保健師には、どのように取り組みに関わってほしいとお考えですか？

**滝脇** 保健師がケアの中にいてくれると大変ありがたいです。自治体に配置

されている保健師の数は十分ではなく、個別に丁寧なケアをするのは難しいと思います。だから、ふるさとの会のような団体をうまく活用していただきたいです。

それと、自治体の保健師と民間団体の中にある保健師がつながれば、お互いの業務もやりやすくなると思うので、両者の連携が推進されていったらいいと思います。

— 滝脇さんの夢や目標について教えてください。

**滝脇** 僕らが経験してきたことをノウハウ化して、多くの大家さんに、生活困窮者を支える取り組みに関わってほしいと思っています。今、全国で、賃貸住宅に住む障害者や高齢者、そういう人を介護している家族が困っているという現実があります。そうなること、今ある住宅を「支援付き住宅」にして

いくしかないのです、誰でもできるようにビジネスモデルを幾つかつくりたいです。

僕らがやっているのは特別な技能を必要とすることではなく、生活の知恵に近いことです。相手に寄り添ったり、相手の世界から物事を見ようとしたりすることです。大家さんに僕らのノウハウを提供できれば、認知症の人や近隣トラブルを起こす人にも住み続けてもらうことができるはずですよ。

それと、まちづくりという視点から、生活困窮者の自立支援をもっと進めたいです。障害者や高齢者でも暮らせる住まいや働ける場所をつくり、彼らがその地域にお金を落としていけば、地域が活性化して



ふるさとの会で開催したガレッジセールの様子（写真提供：ふるさとの会）